

被災住民のメンタル・クライシスと葬送文化の変容 —新潟・山古志住民の事例から—

プロジェクト2 研究員
ライフデザイン学部
井上 治代

はじめに

本稿では、2004年10月23日に起こった新潟県中越地震に被災した旧山古志村（現長岡市山古志地区）住民を対象として、先祖の墓の倒壊と先祖伝来の土地を離れるといった状況下にあった被災住民のメンタルクライシスについて言及し、さらに仮設生活を通じた葬送文化の変容について考察する。

分析資料は2008年2月、10月の2回にわたる住民からの聞き取り調査と、2008年3月の山古志地区全世帯を対象としたアンケート調査（東洋大学実施、以下「アンケート調査」と表記する）に盛り込んだ筆者の質問項目への住民回答、それに文献として『山古志村史-民俗史』を用いた。

1. 墓倒壊からみたメンタル・クライシス

中山間地域の住民は、都市生活者と比べて相対的に先祖伝来の田畑や先祖からの仕事を継承し、同一地域に定住して先祖との繋がりを意識しつつ生活する傾向があると考えられる。その先祖伝来の土地が崩れ、先祖が眠る墓も倒壊したとき、どのようなメンタル・クライシスに陥ったのか、「アンケート調査」では「お墓が倒壊したとき、どのようなことを感じましたか」といった質問を、自由回答形式で尋ねた。

（1）露出した遺骨への衝撃

アンケート調査の結果をみると、墓は「人として子孫を受け継ぎ伝える大切な役目である人生の安らぎのところ、一時とゆるがせにできない大切なところ」とあり、その倒壊を「感無量の気持ち」「不安がつわりの、墓の有難さが身にしみた」と表現した人がいた。中には「お骨がバラバラに散らばっていたので、袋に入れて持ってきた」「骨をすこし持ち出しました。先どうなるかわからなかったの」というように、そのままにしておくのが忍びなく先祖（遺骨）も一緒に仮設住宅に非難させた人もいた。特に倒壊した墓から遺骨が露出していたことが、先祖への「敬愛の念」や「人間の尊厳」からして大きな衝撃を受けたことがうかがえる。

・おコツがむき出しの状態ですら雨風にさらされていた。

写真①



まだ残る倒壊したままの墓

悲しくて泣いてしまった。あの重い石を動かす自然の力の恐ろしさ。言葉がありませんでした。

- ・（遺骨が）バラバラになったのを見た時は悲しかった。
- ・父、母、姉のお骨がむき出しになってしまい、ビニールシートでおおって、家の解体が先で2年近く直してあげられなくて申し訳なく思いました。
- ・まずはお骨が全部見える状態でありましたので一応ブルーシートをかけて風で飛ばないようにお墓の石で固定して「雪が消えるまでじっとまっていますください」と合掌をしました。生きていればこそと思い、「ごめんなさい」ということをお骨に向かって言いました。

そのほか感情表現として「とても悲しかった。言葉で表せないほど悲しかった」「地震の後に村の様子を見たときに全て終了だと絶望した」「悲しいなんとも言えない空虚感」「残念でたまらなかった」「この世の終わりだと思った。とっても怖かったことが心に残っています」「山古志もこれで終わりかと思った」といったように、地震そのものの衝撃も大きいですが、そのことによって、ゆるがずにきた先祖との一体感までもが崩壊し、無惨にも露わになっていた先祖の遺骨が極度のメンタル・クライシスを起こさせたことがうかがえる。そして「何よりも先に修繕したいと思った」「何より一番に復元したいと思った」といった言葉が見られるように、先祖は山古志住民のアイデンティティを表象するものであることがわかる。

（2）「先祖に申し訳ない」

近年、あまり聞かれなくなったが「こんなことをしたらご先祖さまに申し訳ない」という言葉がある。これは自分自身を先祖に定位した言葉である。被災した山古志住民からはこの「先祖に申し訳ない」という言葉がそこかしこで聞かれた。

- ・倒れたままの墓石を構うことができず、離れてしまうのは申し訳ない感じがして”申し訳ありません”と謝って仮設に暮らしていました。

写真②



修理された下の「台座」と上の「竿石」が別の石になっている墓

- ・先祖に申し訳ないという謝罪の気持ちで、是非とも建て替えたいと思っていました。
- ・先祖はじめ亡くなった方々にすまないと思い、早く直してやらなければならないと思った。
- ・先祖に申し訳ないと思ったが、避難中のため次年秋まで直せなかったのが心苦しかった。

（3）墓と故郷

「お墓が倒壊したときにどのようなことを感じたか」という質問をした。すると「墓」に関する質問であるにもかかわらず、「故郷」を強くイメージした人たちがいることがわかった。何代もの先祖が暮らし、自分もそこで生まれ育った故郷、そしてそこで暮らした歴代の人々が眠る（墓がある地）故郷を喪失したくないという思いが強かったようだ。帰村せず他所へ移住した人の中にも「墓だけは山古志に残し」、いずれは故郷である山古志に帰りたくないと願っている。

- ・その時はもう何もかもおわりと思いました。あまりのすごい地震でもうその地では住めないと思ったけど、私は、古里はなくしたくなく、山古志に帰ると念じていました。帰れてよかったです。
- ・市内の霊園を購入することも考えましたが、墓だけは山古志に残しました。子どもたちも含め、最後は山古志に帰りたくと思いました。

2. 仮設暮らしでの先祖供養で感じたこと

アンケート調査において、全回答者255人中、震災後の避難先の住所では仮設住宅184人、親族の家10人、その他9人、無回答52人であった。「仮設住宅には何があったか」という設問で、その選択肢を「仏壇と中身すべて」「本尊・位牌・仏具」「本尊・位牌」「位牌」「その他」「なし」に特定したところ、無回答が一番多くて73人、「本尊・位牌」50人、「位牌」45人、「なし」39人、「その他」11人であった^(注1)。

(1) 先祖への気持ち・一体感

アンケート調査の中で設けた「仮設暮らしでの先祖供養で感じたことをお書きください」という質問に対しては、「どこにいても一緒だからね、という気持ちで朝お参りを欠かしませんでした」など、先祖への一体感を訴えるものがみられた。

- ・先祖供養を1日中忘れなかったし、いつも見守ってくださいとお祈りしていた。先祖の人たちもさぞかし悲しんでいるのではと当時は思っていましたし、お墓のこともいつも心の中で心配していました。いつもごめんなさいということを口にして言ったような気がします。自分でやったことではないので、夜になると涙が出てきた時もたくさんありました。避難所の時も「先祖さんごめんなさい」と心の中でささやいていたこともよい思い出です。

(2) 仮設住宅の不備・不満、先祖への謝罪

仮設住宅では山古志でやっていたような先祖供養ができなかった。自由回答では、そのことへの不満や、先祖に対する「すまない」「心苦しい」といった気持ちを記したものが大多数であった。「押入れ以外は寝床・食事・炬燵・居間すべて1室」であるため、「仏に水をあげる以外」はできず、「心でお祈り申し上げることを幸いとしていました」。仏壇を持ち出せたとしても置く場所がなく、鈴の音や読経の声は隣に響くし、灯明は

部屋が狭く危なくてつけられない。花もなく、ただ心の中で祈るだけであった。持ち出した位牌は、早く家に帰って「仏壇に入れてやりたい」「ご先祖様に背いているようで心苦しい思いでした」というように、人々は山古志で行っていたと同じ形式で先祖供養ができないことを心苦しく思っていた。

仏壇および位牌や仏具いっさいを仮設住宅に持ち出さず、山古志に行った折りに供養していた人たちもいた。「山古志に置いて行ったので、毎日頭が下がる思いでした」「置き去りにした仏壇に謝し、山古志に帰るたびに丁寧にお参りしました」と回想している。また、京都西本願寺から小さな仏壇をもらったことへの感謝や、山古志で慣れ親しんだ僧侶が来て読経してくれたことが「ありがたかった」という声もあった。

- ・仏具ナシ。本尊・位牌を置く場所が無い。ローソク等に火をつけたくとも出来ない。お花もそなえる場所がなく、先祖様には毎日申し訳ないと思いながら手を合わせ、山古志へ帰るまで我慢して頂くよう話ししかけていた。とにかく不便の一言。
- ・位牌だけは持ってきておいたが、部屋が狭いためきちんとした置く場所もなく、ろうそく線香もあげられなかった。
- ・場所がなかったので本尊様は家を守ってくださいとお願いして家に置きました。毎朝、ローソク、線香、あわせて鐘をたたいていたのですが、仮設では隣の家に響くので小さくたたいていました。帰村して大きくたく事ができたときはうれしく思いました。また、先のことを考えるとさみしいやら不安がいっぱいでした。そんな時、般若心境を読んでいると心が落ち着きました。
- ・仮設は狭く安置する場所も思うに任せず、地震以前に行っていた仏の供養など、仮設では無に等しく、時々、お経をあげるくらい。ご先祖様に背いているようで心苦しい思いでした。

2008年2月に小松倉地区で面接調査を行ったときに、Aさん(79歳)は、線香がなかったときは「香の木」を干して細かく刻んで使ったと語った。この地域の住

宅には仏間があって、仏壇を置く場所がつくられているので、震災のときは仏壇の中身は全部で出たが、仏壇は固定されていたので倒れることはなかったという。仏壇は、掃除に出してきれいにした^(注2)。

写真③



仏間の仏壇は固定されていたので、中身が出ただけですんだ

3. 自宅葬から斎場葬へ

2008年2月調査では、虫亀地区長で念法寺住職の若槻敬氏に聞き取り調査を行った。その中で大変興味深い話を聞くことができた。それは、地震前までは葬式は家でやって、オトキ^(注3)は酒屋や料亭^(注4)でやるというパターンが多かったが、仮設住宅では葬儀ができないので、長岡市の斎場「セレモニーホール」で行うことになった。しかし帰村後も斎場葬が定着しつつあるというのである。筆者はその話を聞いた後、仮設生活を通した葬送文化の変化について、アンケート調査や聞き取り調査によってその実態を探ってみた。

(1) 「野辺送り」がなく淋しい

近年まで土葬が行われていた小松倉地区を除けば、山古志の葬法は早くから火葬であった。種苧原地区では明治中期ごろから火葬が始まった（『山古志村史-民俗史』）。面接調査によると、竹沢地区Bさん（73歳）は生涯で土葬を見たことがないという。少しまえまで死者は住民によってヤキバ、オンボヤなどといった屋外

の特定の場所で火葬されていた。竹沢地区のかつての火葬していたところは現在墓地になっていて、木の根元にはお地藏様が安置されている（写真④）。「いわし焼き」と呼ばれる方法で、大きな石の床に割り木を敷いて棺を置く。藁を入れ、火が漏れないようにしてムシロをかけ火をつける、などといった経験者の話を聞くことができた。

震災前は、病院で亡くなった人でも家に帰って葬式を行い、火葬場に向かうときは村人たちによって見送られていた。この遺体が家を出て火葬に向かう時の村人による見送りを、山古志の人は「野辺送り」と言っている。意識調査の自由回答に「青葉台の仮設から棺が出ていくことはなかったので、知人のお参りにも行けなかった。災害で仕方ないと思っていた。それでも仮設から戻らないうちに亡くなっていく人があるのは寂しい気持ちだった」「野辺送りがなく淋しい」「無念」とあるように、仮設生活期間に亡くなった人は、病院から仮設住宅に戻れず、村人による野辺送りもなく、セレモニーホールへ向かったことがわかる。

写真④



手前のスペースで、村人によって火葬が行われていた

- ・村でやったのとは全く違い、知らない間に終わったという感じで、絆が全然なかった。
- ・自宅葬は全くなく、J Aの施設利用がほとんどであった。
- ・すべて葬儀場での式であり、自宅からの出棺ができず、仏に対して無念であろうと思った。

- ・遺体を仮設に連れてこられないので寂しい。セレモニーホールにすべておまかせなので便利だが、少しさびしい感じ。
- ・知り合いや地区の人の場合、香典程度のやり取りくらいしただけでした。

(2) 葬儀費用

自由回答の中には「セレモニーホールでの式は費用が多くかかるだろうと思った」という経済的な意見もあった。

虫亀地区長・若槻敬氏によると、虫亀地区では前々村長の親戚が寄付した祭壇があり、20～30万円するような祭壇を1回1万5千円で貸与していたので葬式代金は安価で済んだ。震災以前は約100万～200万円くらいであったものが、セレモニーホールなどを使用すると300万～400万円になり、なおかつ宿泊するとそのお金も加算された。葬式が終わってから「ああ家でやればよかったなあ」と言うものの、帰村後も、震災前のような自宅葬にはもどらず、セレモニーホールで葬儀を行うことが多いという。

(3) 山古志のやり方から長岡形式に変わった

若槻氏が言うようにアンケート調査でも「山古志のやり方から長岡形式に変わった」「葬式センターを利用するようになった。震災以前と比べて、帰村してからもセンターを利用する人が多い」「すべてセレモニーホールであった。これからは帰村してからもこういうやり方になるのかと思った」「仮設暮らしではそれも仕方なかった。時代の流れもあるし、昔ながらのように、自宅で通夜からオトキまでとは、今後はなかなかいかないのでは…」といった指摘から、「セレモニーホールでやったので簡単でよかった」と言う人もいる。

写真⑤



山古志の人々が葬儀を行っている近代的な斎場の一つ

その背景には、伝統的な葬式における料理や準備の手間が大変であったということがあるという。竹沢地区のBさんによれば「葬式の時、喪家の人は料理づくりなどに手を出さず、勝手する人、勝手頭っていう人がいて、勝手頭の指示で親戚の人が料理をつくる。例えば、遠くから来た泊まり客の食事まで、全部その人たちが作ってくれる。喪家の人たちは手を出さなくて、どこに何があるか聞かれば教えるぐらいでよい」とのことである。しかし一方で、葬式が終われば喪家の人々による「まな板直し」と呼ばれる振る舞いがある。まな板直しとは、「お勝手をしてくれた人たちや葬儀式の手伝いしてくれた人たちに、葬式終了後に、喪家の人がご苦労様でしたということでご馳走することをいう。お葬式が終わって、お骨を拾い、その夜に同じ宗派の人たちが集まって読経（般若心経や念仏）してくれる。そのときに、お赤飯と、コクショウ煮、それと、イゴ^(注5)と、野菜を用意して、皆さんに『生前はお世話になりました』と挨拶をして、さらに『これからも残された人よろしくお願ひします』という気持ちで、料理を振る舞う」のだそうだ。しかし、このようなことは、地震より少し前からやらないケースが増えていたという。それが「地震で吹っ切れた」と語っていた。

おわりに

大震災によって建物が倒壊・半倒壊したとき、住民が持ち出そうとしたものは、お金や通帳、最低限の生活用品は当然のことながら、位牌や仏具、時には先祖の遺骨も仮設住宅に運んだことが印象的である。先祖・墓・故郷は山古志住民をアイデンティファイしている様子がわかり、その破壊によるメンタル・クライシスの実態を知ることができた。

また倒壊した墓石の修復状況や、仮設生活の中での葬儀体験を通じて、山古志の人々の基底文化である伝統的な葬送儀礼が変化しつつある様子がうかがわれた。今後も異文化を経験したことによる文化変容という興味深いテーマを追いつつ、山古志住民のアイデンティティとしての基底文化を通じた地域興しを検討していきたいと考えている。

【注】

- (1) 割合（％）を出さないのは、仮設住宅経験者で「無回答」が29人いたり、「親族の家」に非難した2人が、「本尊・位牌・仏」「本尊・位牌」と回答していたり、割合を出す意味がなかったからである。
- (2) 竹沢地区でも同様の話を聞いた。
- (3) オトキ（御齋）は、仏事法会ぼつうかいのときに出す食事をいう。
- (4) 酒屋や料亭は、地元亀虫にもあるが、小千谷市や長岡市のセレモニーホールの近くにある。長岡市と合併する前は小千谷市にある料亭を利用することが多かった。
- (5) 葬式のときは“いご＝海藻”を作る。海藻を拾ってきて干して味噌を作ってかけて食べる。メイン料理で、仏様に備える。

【参考文献】

山古志村史編集委員会編 1983『山古志村史一民族』山古志村役場